

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

1. 研究課題

東アジア災害人文学の構築

Establishing disaster humanities in East Asia

2. 研究代表者氏名

山 泰幸

YAMA, Yoshiyuki

3. 研究期間

2021年4月-2024年3月(3年目)

4. 研究目的

現代社会は、気候変動にともなう大規模自然災害、地球規模で進行する環境破壊、いままさに人類の脅威となっている感染症など、続発的に襲来し破壊とそれゆえに再創造の契機をもたらす強大な力、総合防災学者の岡田憲夫が提唱する“Persistent Disruptive Stressors(PDSs)”に曝されている。

地理的に隣接し、歴史的に深い影響関係にある東アジアは、気候条件において共通の基盤を有し、自然災害にも共通する特徴があり、人的・経済的な緊密な関係性は、今般の感染症の流行とその対応にも現れている。少子高齢化や過疎問題など共通する社会的課題も多く、これらを東アジアに共通する“PDSs”として包括的に捉えることが可能である。

本研究の目的は、「災害」を広く“PDSs”と捉えて、東アジアにおいて積み重ねられてきた災害対応の歴史を総合的に検討し、災害をめぐる歴史的に形成されてきた思想や文化、社会関係などを、“Sustainabilityの実践知”と見なして、東アジアに共通する特徴と地域ごとの展開の諸相の解明を通じて、「東アジア災害人文学」の輪郭を描き、方向性を示すことにある。

Modern society is being adversely affected by serial invasions, such as large-scale natural disasters triggered by climate change, environmental destruction on a global scale, and infectious disease outbreaks that threaten humankind. Thus, we are exposed to “Persistent Disruptive Stressors”(PDSs), which constitute a powerful force that drives re-creation, as advocated by Norio Okada, a comprehensive disaster management scholar.

East Asian countries are geographically contiguous, have close historical ties, and share similar climatic conditions, resulting in a similarity among natural disaster characteristics. This human-economic relationship is also evident in the current pandemic and responses

thereto. Moreover, since East Asian nations have a number of social issues in common, such as low birth rates, aging of societies, and population decline, it is possible to comprehensively understand these East Asian characteristics as common PDSs.

The purpose of this study is to 1) broadly identify “disasters” as PDSs and comprehensively review the history of disaster response in East Asia; 2) investigate common characteristics of East Asia and different regional aspects by considering historically formed thinking, cultures, and social relations in respect of disasters as “practical knowledge on sustainability”; and 3) outline and propose a direction for establishment of “East Asian disaster humanities.”

5. 本年度の研究実施状況

最終年度にあたる 2023 年度は、対面を基本とし、オンラインを併用した研究会を合計 5 回実施した。第 1 回は京都大学総合博物館特別展「京都白川の巨大土石流―埋もれた先史土砂災害に学ぶ」を企画した富井眞班員の展示解説をふまえた検討会をおこない、第 2 回は京都大学防災研究所において「風土」をテーマとして上原麻有子班員と山口敬太班員がそれぞれ哲学とまちづくりの異なる視点から研究報告をおこなった。第 3 回は IDRiM 国際総合防災学会でのセッション、第 4 回は人文研アカデミーのシンポジウム「気候変動・災害多発時代に向き合う人文学―東アジア災害人文学の挑戦」により、それぞれ国内外の研究者と一般社会に向けて研究成果を発信した。第 5 回は外部からゲストとして加藤泰史氏と Yoann Moreau 氏を招へいし、哲学・思想の方面からそれぞれ災害について考え、報告と討論をおこなった。

6. 本年度の研究実施内容

- 2023-05-13 災害と考古学 京都白川の巨大土石流：埋もれた先史土砂災害に学ぶ 発表者 富井眞 大正大学
- 2023-08-27 災害と風土 風土とまちづくり：共同体の再編と地域文化の継承・創生 発表者 山口敬太 地球環境学堂 和辻哲郎の「風土」論再考：風土としての看護的自然の日本芸術 発表者 上原麻有子 文学研究科
- 2023-09-28 Implementation gaps are persistent phenomena in disaster risk management 発表者 岡田憲夫 関西学院大学 発表者 多々納裕一 防災研究所 発表者 大西正光 工学研究科
- 2024-02-17 気候変動・災害多発時代に向き合う人文学：東アジア災害人文学の挑戦 語り交わし編み合う学融の場へ向けて：頻発災難圧を飛翔する 発表者 岡田憲夫 関西学院大学 気候変動と天道策：災難をさける「理致」 発表者 趙寛子 ソウル大学 気候変動と風土変動 発表者 張政遠 東京大学 現場で生きる人文学の可能性：桜島防災を事例として 発表者 大西正光 工学研究科 中国災害考古学事始 発表者 向井佑介 司会 山泰幸 関西学院大学 コメンテーター

多々納裕一 防災研究所 コメンテーター 上原麻有子 文学研究科

2024-03-23 災害と思想 Living with disasters 発表者 Yoann Moreau EHESS-CNRS 自然

災害がもたらす思想的転換：大地が揺れると思想も変わる 発表者 加藤泰史

梶山女学園大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

【学会セッション】

国際総合防災学会 IDRiM 2023 Special session 1: Implementation gaps are persistent phenomena in disaster risk management (2023.09.28-29 at IIT Roorkee, India. Norio Okada, Hirokazu Tatano, Masamitsu Onishi, et al.)

【公開シンポジウム】

人文研アカデミー2023 シンポジウム「気候変動・災害多発時代に向き合う人文学—東アジア災害人文学の挑戦」(2024年2月17日、講演：岡田憲夫・趙寛子・張政遠・大西正光・向井佑介)

8. 研究班員

所内

向井佑介、岩城卓二、矢木毅、村上衛、平岡隆二、都留俊太郎(10月末まで)

学内

多々納裕一(防災研究所)、矢守克也(防災研究所)、中北英一(防災研究所)、上原麻有子(文学研究科)、大西正光(工学研究科)、山口敬太(地球環境学堂)、清水美香(総合生存学館)

学外

山泰幸(関西学院大学人間福祉学部)、梶谷真司(東京大学大学院総合文化研究科)、小川伸彦(奈良女子大学文学部)、鍾以江(東京大学東洋文化研究所)、関谷雄一(東京大学総合文化研究科)、張政遠(東京大学総合文化研究科)、加納靖之(東京大学地震研究所)、大邑潤三(東京大学地震研究所)、富井眞(大正大学文学部)、岡田憲夫(関西学院大学災害復興制度研究所)、阿部健一(総合地球環境学研究所)、寺田匡宏(総合地球環境学研究所)、嶋田奈穂子(総合地球環境学研究所)、岡村秀典(黒川古文化研究所)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	1	0	0	0	0	5	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	3	11	3	7	7	5	28	3	7	7	5
		(4)	(2)	(2)	(2)	(2)	(7)	(2)	(2)	(2)	(2)
国立大学 (内女性)	2	8	2	2	1	1	12	3	3	1	1
		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)
公立大学 (内女性)	2	2	1	0	0	0	2	1	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学 (内女性)	4	6	0	0	0	0	12	0	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	2	2	0	0	0	0	6	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関 (内女性)	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関 (内女性)	7	7	7	0	0	0	7	7	0	0	0
		(2)	(2)	(0)	(0)	(0)	(2)	(2)	(0)	(0)	(0)
その他 ※ (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	22	38	13	9	8	6	74	14	10	8	6
		(9)	(5)	(3)	(3)	(3)	(12)	(5)	(3)	(3)	(3)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

なし

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

これまで定例の研究会やシンポジウムにおいて発表した内容を論文集にまとめ、2024 年度末に山泰幸・向井佑介編『東アジア災害人文学への招待—気候変動・災害多発時代に向き合う人文学（仮）』を刊行する予定である。また、東アジア災害人文学にかかわる共同研究は、京都大学防災研究所などの協力のもと、2024 年度以降も場所と構成を変えながら継続していきたいと考えている。